

保育者養成校における弾き歌いレッスンの実態と カリキュラムに関する一考察 —指導者アンケートの結果からみえてくるもの—

諸井サチヨ

(2017年9月25日受理)

要 旨

保育者養成校で学ばなければならない基礎科目である音楽については、弾き歌い技術の習得が中心となっている。保育者養成校に通う学生のほとんどが弾き歌いに必要なピアノ技術において初心者であるため、ピアノ技術だけでなく、現場で求められている弾き歌い技術を習得するにあたり、指導者は短いレッスン時間での指導にかなり苦勞している。本研究では、指導者側に現在のレッスン運営やカリキュラムの実態に関する調査をし、様々な角度から調査を実施した。調査結果からは、以前のバイエル等の教則本中心のカリキュラムから幼児歌曲中心のカリキュラム内容に変更した点が有意義であると明らかになった。またそれぞれの指導者がピアノ技術の指導だけにとどまらず、弾き歌いに必要な「歌唱」についても十分工夫しながら対応出来ている事もわかった。本研究を実施することで、弾き歌いレッスンの運営における改善点が明らかとなり、1年次だけでなく2年次のカリキュラムについてもより質の高いものに改善することで学生の能力向上がさらに見込める事がわかり、今後のレッスン運営、カリキュラム作成に示唆される結果が明らかになった。

キーワード 指導、カリキュラム、領域、表現、弾き歌い

I. はじめに

A 大学短期大学部では、入学者の半分以上がピアノ初心者であるにもかかわらず、ほとんどの学生はピアノを1年次の授業でしか学ばない。ピアノに対して積極的になれない学生も多く、また開講曜日・時限の関係で、2年次のピアノレッスンを履修する学生が相当数減ってしまう現状がある。2年目も選択授業を履修してもらう事が、ピアノの技術取得にも弾き歌いの訓練にもなるのだが、現在は残念ながら、そういう環境ではないため、1年次のカリキュラム、指導法をより充実させていく事が優先される。

内容としては、平成26年度までのカリキュラムではバイエルが中心となり、学生の意欲

を刺激しづらい内容となっていた。

学生は、入学後幼児歌曲などの楽しいイメージが持てる楽曲を学べると考えているため、そういう状況の中で、バイエルやツェルニー等の教則本ばかりで訓練を強いることはいい結果につながるか、かなり疑問であった。試みとして、レッスンで取り扱う楽曲(カリキュラム)を変更し、バイエル等の教則本を外した。変更後、その事がどのように影響しているのか、変更は正しかったのかを本研究で検証を行う。また、将来、子どもたちと「表現」領域で特に音楽表現を指導する立場となる保育者を育てる養成校での音楽科目のあり方についても検討していきたい。

養成校での弾き歌いやピアノ指導については、主に初心者に対してのピアノ指導となり、多くの指導者がレッスン運営に苦勞するため、指導法などについては研究されることもある。しかしながら、“研究の対象は多くの場合、保育者や学生に向けられており、保育者を指導する立場の教員に必要な音楽の能力についてまではあまり触れられていない”¹⁾と述べている執筆者がいることからわかるように、指導者の工夫や指導力について踏み込んで検証している研究が少ない。本研究では、学生との関わり方や現状のレッスン運営、それらを基にしたA大学短期大学部のカリキュラムについての課題をさらに深く検証していくものとする。レッスン形態や採用しているテキスト、作成されたカリキュラムはそれぞれの養成校で違いがあり、学生総数や音楽科目の履修状況等でもそれぞれの学校にあったものが必要となってくる。そのため、本研究では、A大学短期大学部のレッスン運営の実態を調査しながら、指導者側の視点からもカリキュラムの内容、「表現」領域の基礎科目としての音楽の弾き歌いレッスンのあり方について総合的に考えていきたい。さらには、本研究結果を今後、養成校での2年間を通してのカリキュラム作成にも活用していきたいと考える。

II-1. 学生の履修状況

A大学短期大学部では、音楽科目について1年次は履修が必須となっているが、2年次は選択科目となる。開講曜日や時限の関係もあるが、2年次でも音楽科目を継続して履修する学生が全体の1/5程度まで減っている状況である。1年次のピアノレッスンは1グループ8~9名で編成され、グループ単位ではあるが、実際にはマンツーマンレッスンの形式でレッスンを実施している。

II-2. 調査対象・方法

今回は、レッスンの実態調査とカリキュラムの研究を実施するため、調査対象は、A大学短期大学部でピアノレッスンを担当している12名の指導者に対し、実施した。設問は弾き歌い指導の現状とカリキュラムについて、選択式と一部記述式の無記名でのアンケート調査を実施した。12人中、11名から回答を得られた。

※アンケート結果については公表する旨、同意を得ている。

Ⅲ. 調査結果

1-a. 1グループの人数について

弾き歌いレッスンを行うにあたり、1グループの人数編成について、指導者の立場ではどのように感じているかを調査した。調査の結果、「多いと感じている」と答えたのが6名、「適切である」が4名であった。先の研究で、学生にも同じ内容の調査を実施しており、76%の学生が1グループの人数について「適切である」と回答している。この調査からわかった点は、指導者側と学生側の認識には差が生じているという点である。A大学短期大学部では、1コマ90分のレッスンを1グループ8人から9人編成で実施している。単純に計算すると一人当たり10分程度となる。幼児歌曲は、季節の歌や生活関連の歌については、1曲の演奏時間がそれほど長くはないため、問題なくスムーズに弾き歌いできれば、全体で1分から2分程度しかかからない。そのため、読譜にあまり時間のかからない学生や既にピアノがかなり上手に弾ける学生であれば、一人当たり10分のレッスン時間は適切だと言える。しかしながら、練習してきた曲をレッスン中にただ単に発表し、練習してきたことの確認作業だけでなく、「音楽表現」としての弾き歌いを追求する場合には、10分のレッスン時間では十分だとは言えない。また、ピアノ初心者がほとんどである養成校のピアノレッスンの場合、課題として出された曲を問題なく弾けるようになるまで練習時間が確保できない、もしくは自分一人での練習には限界のある学生が多いため、このような場合も、一人当たり10分のレッスン時間では全く足りない状況である。

今回の調査では、レッスン時間自体はあまり問題でないと感じている教員が複数存在し、レッスン運営の問題点は一人当たりのレッスン時間を改善することだけでは不十分だと言うことが明らかとなった。

1-b. それぞれの回答を選択した理由について

「多い」を選んだ理由：

- ・90分を人数で割ると一人当たり10分にも満たずに通り一遍の指導に終始しがちになる。
- ・きめ細かな指導をするためには最低でも一人15分から20分は必要だと感じる。
- ・10分以下だと学生の技術向上は難しいと考える。
- ・初心者のケアが十分に出来ない。

「ちょうどよい」を選んだ理由：

- ・幼児歌曲は短いので、10分あればミスを直し、曲想をつけることができる。
- ・学生が集中して取り組める。

レッスン内容を充実させるためには一人当たりのレッスン時間は現状では足りないが、学生自身の集中力を考えると10分程度が妥当であるという意見があることもわかった。また、レッスンを進めていく上で、どのような点に時間をかけているかという事が回答の選択に結びついているという事が明らかとなった。

2. 一人当たりのレッスン時間の配分で、工夫している事

工夫している点では、「毎週レッスンを受ける順番を変えている」という意見が最も多かった。「習熟度に個人差があるため、公平に一人何分とは決めずに、必要に応じて時間を配分している」という意見もあった。習熟度別に多少なりともレッスン時間の配分を変える場合は、学生の不公平感をなくすため、時間配分について理解を得るように説明しているという事もわかった。

3. 1 グループの理想的な人数について

1 グループ当たりの理想的な人数については、指導者によっても受けとめ方に差があるが、おおむね6、7人という結果となった。6人程度でクラス編成が可能であれば、一人当たり15分のレッスン時間の確保が可能になってくる。

4. グループ編成の方法について

グループ編成については、現在、学籍番号順で実施している。この点においては以前よりレベル別にした方が効率的だとの意見もあったが、アンケートを実施した結果、「レベル別にした方がよい」が2名、「学籍番号順のままでよい」が5名、「どちらとも言えない」が3名であった。現状のままで特に問題を感じていない指導者が多い事がわかった。しかしながら、どちらとも言えない、レベル別がいいという意見も少数ではあるがまだ残っているため、グループ編成については指導者側でも意見が分かれる難しい内容であることもわかった。

5. レッスンでの学生との関わり方について

ピアノレッスンは個人レッスンとなるため、学生との関わりが講義系の科目よりも密になる。そのため学生との関わり方や接し方について、丁寧な対応、個々に合わせた対応が必要となる。そういった部分では、難しい要素が多い実技科目だと言えるが、ほとんどの指導者が学生との関係性については、難しさを感じていないという結果が得られた。「難しさを感じたことがある」と回答したのが2名、「難しさを感じたことはない」が8名であった。難しいと感じている理由としては、意欲の低い学生への対応があげられている。実技科目であるため、練習をやっている・やっていないは、レッスンで顕著にあらわれる。ピアノに対して消極的な学生への対応に難しさを感じている事があらためてわかった。さらには、ピアノを教える場合、指のかたち等を教える課程で、多少なりとも学生に触れなければならない場合があるが、そういう行為に抵抗を感じている指導者がいることが明らかとなった。

4

6. ピアノ教室でのレッスンと養成校での弾き歌いの指導との比較について

ピアノ教室や自宅での個人ピアノレッスンと養成校での弾き歌いの指導を比較して難しさはどんな点にあるかを調査した。その結果、次のような回答が得られた。

- ・大譜表を見て演奏する点
- ・歌詞もしっかり把握していなければいけない点

- ・調性を変更できない点
- ・子どもたちの存在を意識させる点
- ・伴奏と歌、両方をバランスよく指導しなければならない点
- ・ピアノに向かう意識や自覚も育てていかななくてはならない点
- ・子どもたちにも届く豊かな表現力が必要な点

ピアノ教室での指導や個人的にピアノを指導している場合、ほとんど自らが望んで学んでおり、日々の練習は大切なものであるということが理解され、習慣化されている。しかし、保育者養成校に入学し、これまでピアノを弾いたり歌を歌ったりする習慣がなかった学生が、ピアノの譜面を見ながら歌い、表現力豊かにその楽曲を弾き歌いするという作業は、とてつもなく難しいと感じ、また思うように出来ないため、そういった学生を2年後に現場に出られるだけの技術が身に付くように指導するには大変難しさを感じているという事がわかった。

7. 歌唱指導について

養成校ではピアノ指導というだけでなく、「弾き歌い」のために歌唱指導もバランスよく行っていかななくてはならない。弾き歌い指導の歌唱部分についてどのように取組んでいるかを調査した。その結果、次のような回答が得られた。

- ・子どもたちに教えるためには声量が必要だと伝えながらレッスンしている。
- ・歌詞の意味を理解し情景を思い浮かべて歌うように指導している。
- ・声を大きく、高音をしっかりと出すように指導している。
- ・歌詞を覚えてイメージをもち、歌詞を朗読させている。
- ・ピアノに向かって声を出し、ピアノが共鳴するのを体験してもらう。
- ・羞恥心を感じないですむようにクラス全員で歌う。
- ・おなかから声を出す意識を持たせる、腹式呼吸を意識させる。
- ・目線が鍵盤ばかりにいかないように壁などを見て弾き歌いをさせる。
- ・音程をとるのが苦手な学生にはピアノで旋律を弾きながら歌ってもらう。
- ・ピアノは失敗しても歌唱はとまらないように指導している。
- ・子どもに伝わるように、発音をわかりやすくするように伝えている。
- ・母音を響かせて歌うように指導している。
- ・口角をあげて微笑むようにし、明るく響く声を出すように指導している。
- ・先生になったつもりで歌ってもらう。

弾き歌い指導のレッスンではあるが、実際にレッスンの中で発声練習を実施しているという指導者もいることがわかった。養成校での弾き歌い指導をしている指導者のほとんどはピアノの専門家だが、歌唱についてもそれぞれによく研究し、実践的なアプローチを試みていることがわかった。

8-a. 養成校でのピアノ指導に教則本は必要か

ピアノ技術の習得に欠かせないとされている教則本について、保育者養成校でのピアノ指導でも同じように教則本が必要かという点を調査した。その結果、「必要である」と答えたのが5名、「必要でない」が3名、「複数回答・どちらとも言えない」が3名であった。

8-b. それぞれの回答を選択した理由について

「必要である」と答えた理由：

- ・初心者にとっては、上達の早道である。
- ・基礎練習が必要である。
- ・基本の理解と運指を学ぶことが必要である。
- ・楽譜を読む力を育てることができる。
- ・指の強化には必要である。

「必要ない」と答えた理由として、

- ・現在のレッスン時間では足りない。
- ・幼児歌曲のレパートリーを増やすことが大切である。
- ・実際に現場で教則本は使わない。

バイエル等の教則本については、条件付きではあるが「必要」と答えた指導者がいることがわかった。

9. 指番号について

運指を理解するため、または、つまずきやミスにつながるので上達の近道にもなるため、初期段階では「必要」と答えた指導者が9名と最も多かった。1番2番の指だけで弾こうとする学生もいるようで、スムーズに弾くためには指番号を守ることは必要だという意見もあった。教則本と同様、指番号についても初心者であればあるほど、大切だと考えている指導者が多い事も明らかとなった。その一方で、指番号については、「守らなくてもよい」と答えた指導者もいた。

10. 読譜指導での効果的な方法について

「効果的な方法があった」と答えた指導者が6名いた。その具体的な方法としては、「声に出して片手ずつ弾きながら階名唱をおこない、理解して覚えてもらう」、「時間を決めて音名を書かせる」、「線や間など楽譜の基本的な事を説明してからレッスンを始める」、「音程あてドリルやリズム打ちドリルを解く」、「左手の和音の形を、鍵盤を見ながら覚えるようにする」等があった。「効果的な方法がなかった」と回答した指導者が3名いた。

11. カリキュラムに教則本を取り入れなくなった事について

カリキュラムから教則本（バイエル）を外した事に対しては賛成意見が多く、「幼児歌曲に取組める時間が増えるのでよい」と答えた指導者は6名であった。その他の意見として、

「幼児歌曲中心でもいいが、5曲程度はバイエル等の教則本の中からやさしい曲を入れても良いと思う」や「楽しみながら取り組めて指の訓練となる教則本があれば活用してもいいのではないか」という意見、また「初心者に限り教則本を活用してもいいのではないか」という意見があった。

12. 幼児歌曲の伴奏で、原曲ではなく簡易伴奏を使用することについて

簡易伴奏については、「賛成」と「やむを得ない」を合わせると9名の指導者が賛成意見であった。A大学短期大学部では、これまでレッスンで使用している楽譜はほとんどが作曲者のオリジナルの伴奏譜であった。原曲のみ載っている楽譜の場合、簡単な伴奏型の曲が極めて少なく、初心者の学生が自分自身で選曲できるものが限られてしまう。また、難しい伴奏を簡単にアレンジすることは学生自身だけの力では難しいため、指導者がその都度簡易伴奏に編曲しなくてはならず、その部分に時間を費やす事になっていた。カリキュラムにバイエル等の教則本を取り入れていたことも影響し、幼児歌曲に積極的に取り掛かれるのはピアノ技術が備わっている経験者のみになっていた。

カリキュラムからバイエルを外すと共にレッスンで使用する楽譜も変更し、現在の取組みでは、原曲を集めた楽譜と簡易伴奏の楽譜、2種類を採用している。ピアノ初心者は左手部分が三和音で編曲されている簡易伴奏譜を使用し、ピアノ経験者は原曲譜を使用するようにしている。原曲の場合、経験者でも難しい伴奏型の曲もあるため、場合によっては、原曲と簡易伴奏を混合させている。

13. その他意見について

指導者1：

2年次の段階でもへ音記号の読譜が出来ない学生が少なからずいる。1年次の前半で楽譜に音名を書き込んででもやむを得ないが徐々に書かなくても読めるようになるように指導してくることが必要だ。様々な意見があると思うが、実際の現場では簡易伴奏でもしっかり弾けた方が実践的であるため、原曲伴奏にこだわらずに簡易伴奏でも曲数をこなしていった方がよい。

指導者2：

カリキュラムについては、曲順を難易度が優しい順に記載があると指導しやすい。曲によって練習する意欲が左右する場合があるので、ジブリやディズニー、アニメの主題歌等も課題に取り入れてもいいのではないかと。移調して弾く練習も現場で役立つため、必要ではないか。

指導者3：

簡易伴奏でも少し工夫することで楽しく感じられるようになるため、少しアレンジできるならした方がよい。

指導者4：

ピアノの上級者には、原曲を弾かせてあげたい。

指導者5：

初級コースを設置してもいいと思う。初級クラスでは、読譜などの基礎を中心に指導を行なうようにする。

指導者6：

2年次もピアノを必須にする方がよい。2年間通してのカリキュラムにする方がいい。

指導者7：

この曲だけは自信を持って弾き歌いができるという曲のレパートリー作りをしてもいいのではないか。卒業後、子どもたちと前向きに音楽を共有してもらえるのが大切である。

IV. 進度票

ピアノレッスンの学習補助的なものとして、「進度票」という個人カルテを作成している。指導者側からの提案で始められたもので、学生一人一人に配布されている。1年を通して練習していく楽曲の候補を記載し、レッスンで合格した曲には指導者から印をもらうシステムとなっている。その他にレッスン日程を記載し、レッスンで行った内容を書き込む事ができるようにしている。以前は、この進度票に記載されている楽曲がほとんどバイエルの番号であった。(図1) 以前の内容に従うと、幼児歌曲が1年を通して5曲程度しか学べないようになっている。数年前にこの進度票からバイエル等の教則本をはずし、全て幼児歌曲にすることで、学生の意欲向上につなげてきた。

内 容	
前 期	後 期
46・47・48・49・50	14 イ調短音階 115・116
51・53・54・55	15 ト調長音階 118
58・59・60	16 とんぼのめがね・へ調長音階
61・62・63	17 120・127
78・80・83・85	18 130・132
90・92	19 134 二調長音階
93・95	20 変ロ調長音階 136
100・102・104	21 145・146
106・109	22 147 おもいでアルバム
110 ハ調長音階 114	23 カンガルー
礼・カデンツ・あさのごあいさつ (2)	24 149
朝のうた・あさのごあいさつ (1)	25 おもちゃの兵隊の行進
おかえりのうた・おべんとう	

図1 カリキュラム変更前の進度票 (一部分)

8 **V. 考察**

今回、初めて、ピアノレッスンを担当している指導者に対してアンケートを実施し、検討すべき事項が明らかとなった。筆者自身が日頃学生指導で感じていることだけでは改善しづらい点が、他の指導者の考えを参考にできたことで、レッスン運営やカリキュラム、指導法についての実情や課題、改善のポイントがより深く明らかになってきた。

① 1グループの人数について

一人当たりの時間配分にも大きく影響してくる問題であると言える。レッスンでは、アドバイスを受けた内容を出来る限り早いうちにふり返り、反復練習を行う事が上達の近道であるため、理想としては、90分の授業時間内にそれぞれがアドバイスを受けた内容を練習室で反復練習する時間、さらには、再度指導者にみてもらう時間が必要であり、そのような繰り返しの練習が大切である。しかし、現状の一人10分程度のレッスン時間では、初心者の学生で何度も弾き直しをしてしまうようなタイプの学生においては、1回のレッスンで1曲も達成、合格できずに終わる場合もあるため、やはり一人当たり15～20分確保できるのが最適であると考えられる。レッスンで1曲も合格しないで終わってしまうと学生の意欲面にも大きく影響するため、成果を目に見えるように評価していくためにも時間が必要である。

② レッスン時間の配分について

指導者側が感じているように、ピアノの演奏技術がこれまでの経験年数や取組み方等、入学時に既に大きく差が生じているため、本来は、その習熟度に見合った時間の配分をすることが効果的である。しかし、学生の立場で考えると、時間配分に関しては公平になるように配慮も必要である。

現在1年次は多いクラスの場合は、9人編成になっており、一人当たりのレッスン時間が正味10分もない状況だ。調査結果にあるように、1クラスを6人程度で編成できれば、一人当たりのレッスン時間が十分に確保できるため、レッスン中にアドバイスを受けたことを練習室で反復練習し、再度、指導者から指導を受ける流れのレッスンが可能になる。こういった流れのレッスンが実現すれば、初心者の学生でも1回のレッスンで1曲でも多く合格できる可能性が広がり、翌週のレッスンに臨む意欲が沸くと考えられる。1クラスの人数やレッスン時間の配分については、現状よりも人数は若干少なく、時間は一人当たり15分～20分確保できると学生の實力もさらにあがると考えられる。

③ グループ編成の方法について

入学後にピアノのレベルを決める試験を実施し、レベル別にグループを編成している養成校もある。入学後すぐの段階、もしくは入学前レッスン講座時にレベルチェックを行い、単純に習熟度別に分ける方法も今後検討していかなくてはならないだろう。しかしながら、入学時に実際にどの程度弾き歌いが出来るかは、ピアノの経験年数をたずねるだけでは不十分であり、レベル別にするのであれば、入学後しばらくレッスンを受けた後に、弾き歌いの試験でレベルチェックを実施する方法がより効果的だと言える。弾き歌いはピアノの演奏技術と歌唱の技術がバランスよく備わっている事が前提となるため、ピアノの習熟度だけでクラスを分ける事が正しいとは言えない。ピアノそのものや音楽、特に読譜に関して苦手意識を持っている学生も多く、練習に消極的、もしくはアルバイトやその他の活動によって、練習に時間的制約のある学生も多い。そのため、ただ単純にピアノがどの程度弾けるのか、だけでグループ編成をすることがやはり最善だとは考えにくい。学籍番号順で分ける方法につい

ては、これまでの指導経験からいい点もあると考えている。この点においては、他の指導者も現状のままのクラス編成で問題ないと考えているため、現状維持でも効果に違いは出ないと考えられる。学籍番号順にグループを編成すると、様々な経験値の学生が混合となるため、お互いの演奏を聴き合い、学び合える事が大変多い。初心者の学生にとっては、ピアノ経験があつて大変上手に演奏できる学生の弾き歌いを身近で見ると、聴く事は大変いい刺激になる。さらには、自分がなかなか取り組めない難しい楽曲について聴くだけでも、“曲を知る”という意味で有意義である。また、クラスの中に数人でも経験者がいると、初心者は経験者にわからないところをきくようになるし、経験者は初心者の学生に関わることで「教える」という事を学べる良い機会となり、大変素晴らしい相乗効果が得られる。その一方で、初心者やなかなか上達できない学生の底上げだけでなく、ピアノに関しては問題なく弾ける学生への配慮も大切だと言える。指導者側としては、うまくいっていない学生に目がいき、手をかけたくなるものだが、問題なく弾けている学生がレッスン自体を物足りないと感じないような進め方にも配慮が必要となる。以上の事をふまえて、グループ編成に関しては、どんな方法を選択しても多少のデメリットはでてしまうため、毎年学生の様子をみながら、年度ごとに最適なグループ編成をしていくしかないと考えられる。「前期と後期でグループ編成を変える」という自由記述での意見もあり、前期は学籍番号順で組み、後期は前期の様子や進度を鑑みながら、レベル別に移行する方法も選択肢として有効であるという事がわかった。

④ 指番号について

筆者の先の研究でも述べているが、指番号を楽譜に書き込むと、その番号だけをみて弾くようになってしまい、音符でなく指番号だけを見て弾く癖がついてしまう場合がある。前もって指導者が指番号を書き込んでしまえば、その分、学生にとっては面倒な作業が減るので、いち早く練習にとりかかれるという大きなメリットもあるが、自分自身で指番号を考える機会がなくなり、運指について理解しないまま終わってしまう。そういう対応をし続けると、最終的には、どの調であっても「1番=D」と考えてしまい、何度もミスをしたり、止まったりしてしまう事につながってしまう。また、指導者側が一方的に考える指番号がその学生に合っているかも疑問である。指番号については、指導者がすぐに書き込むことはせず、時間を要することではあるが、運指について理解できるようなアプローチでレッスンをおこなっていく方が適切であると考えられる。指番号は、個々の指の長さ、指と指の開き具合等に違いがあるため、正解は一つではなく、それぞれに合った運指を見出すことが重要である。さらには、一度考えたらその指番号を守る事が非常に大切である。行き当たりばったりの指番号・運指は、ほとんどの場合ミスタッチに繋がる。そして、何度も同じ間違いを繰り返すようになるため、指番号は個々に合わせて決め、それを守るように指導すべきである。そのためにも、レッスン時間の十分な確保は重要な要素と言える。指番号を決めていても、指番号を守らない学生も多い。指番号を楽譜に書き込んだとしても次のレッスン時に自己流の運指に戻っている場合も多い。指番号の必要性については、根気よく対応していかななくてはならない内容ではあるが、なぜそのような指番号になるのか等を丁寧に説明しながら対応したり、他

にもいくつか具体例の手本をみせたりしながら対応を工夫している教員が11名中10名もいることがわかり、今後の指導に活かせる調査結果が得られた。

⑤ 読譜について

指導者側の意見にあるように、「どの位練習したか、どの程度ピアノ練習に時間をさいたか」が影響する部分が多い。読譜力向上の方法としては、やはりたくさん楽譜を見る、読む、見ながら弾く練習をすること、時間がかかっても音名を楽譜に書き込まず、音名に頼らずに練習する事に尽きるが、いずれも初心者にとってはかなり時間を要する作業であるため、継続していく事が厳しいと感じる。さらには、頭で理解することが早くてもそれが指に伝わるまでに時間がかかり、なかなか頭と指がうまく繋がっていかない点にも難しさがあるようだ。

⑥ 教則本の扱いについて

現状のレッスン時間では教則本で基礎的な運指や読譜を導入として行い、それに引き続いて幼児歌曲の弾き歌いの指導を行なう事が不可能に近い。通年で30回しか授業がないため、教則本や基本的な運指、指番号の理解に時間をとられすぎてしまうと、実際現場で必要な幼児歌曲の理解や習得にほとんど時間がかけられなくなってしまふ。実習や卒業後に即戦力として力を発揮することはかなり難しくなるだろう。

⑦ 歌唱の指導について

弾き歌いのレッスンにおいて、歌唱の部分についてはピアノの専門家である指導者側の悩みが多いと思われていた。しかしながら、調査結果によると、具体的なアプローチで学生の歌唱力が向上するように、さらには緊張に左右されすぎないように様々な方法で工夫しながら指導していることがわかり、興味深い結果となった。

⑧ 簡易伴奏を使用することについて

やむを得ないという部分もあるが、指導者側の意見としては、原曲の美しさを知って欲しいという願いや、実力のある学生には原曲に挑戦してほしいという思いもあるようだ。また原曲での伴奏は、楽曲の持つ世界、情景、歌詞の意味を音楽で表現することができ、子どもたちの表現活動のサポートとしても役立てる事が可能だと言える。

VI. まとめ

今回のアンケート結果から、弾き歌いレッスンの実態、今後の改善点が具体的に把握できた。カリキュラムについては、以前のバイエルなどの教則本ばかりの内容を検討し直し、幼児歌曲に絞った内容を作成したことは調査結果からおおむね正しかったと言える。現場で必要な楽曲を多く知ることが可能となっている。今後は、教則本の扱いについて再度検討し、

初心者には運指や読譜の基礎が理解でき、それらが根付くような練習曲をレッスン時間や年間のカリキュラムを鑑み、無理のない範囲で選択することが必要であると考えられる。ピアノレッスンだけでなく、声楽の授業内でも学生の技術向上に役立つものを取り入れていけるのではないかと考えられる。グループ編成については、入学直後からレベル別にするのではなく、前期と後期で習熟度や進度をふまえ、グループ編成をかえる方法も考えられる。弾き歌いの技術は言うまでもないが、保育現場では、様々な音楽的要素が総合的にバランスよく必要となる。現場に出るようになれば、子どもたちの音楽「表現」の活動を自身の技術で支えなくてはならない。養成校での2年間は大変短いため、無駄なく実践力をつけられるようなカリキュラムが必要になってくる。

今後は、1年次に習得した技術をさらに発展させるためにも2年次に繋がるようなカリキュラムを検討していくことが必要だ。2年次にも有意義なカリキュラムを設けることで、履修者を増やし、総合的な力を2年間かけて培うよう、計画的に指導していくことが必要となってくる。

領域「表現」の基礎科目である音楽を全ての学生が養成校でしっかり学び、将来現場で子どもたちと関わる時に自信を持って活動に臨めるよう、レッスン運営のあり方やカリキュラムを学生のニーズに合った質の高いものにしていきたい。

最後に、本研究を遂行するに当たり、アンケート調査にご協力いただいた諸先生方に心から感謝する。

引用文献

- 1) 中村紗和子 保育者養成校におけるピアノ指導の一考察 九州女子大学紀要第51号p89

参考文献

- 1) 諸井サチヨ 保育者養成校での『弾き歌い』指導に関する一考察：学生のピアノ技能に関する実態調査を中心に 淑徳大学短期大学部研究紀要55号 2016
- 2) 諸井サチヨ 保育者養成校における歌唱指導について：学生の歌うことに関する意識調査をもとに 淑徳大学短期大学部研究紀要56号 2017
- 3) 仲嶺まり子 こどものうた弾き歌い指導における副教材の活用について：「指使いサブノート」導入の試みを通し 別府大学短期大学部研究紀要No.33 2014
- 4) 斉藤美和子 保育者養成におけるピアノ指導の現状と課題 新潟人間生活学会 2013
- 5) 志民一成 [ほか] 『音楽を学ぶということ』教育芸術社 2016
- 6) 板野和彦 『ユニバーサルデザインの音楽表現』萌文書林 2015
- 7) 文部科学省 『平成29年告示幼稚園教育要領保育所保育指針幼保連携型認定こども園教育・保育要領原本』チャイルド社 2017